

米芾の英光堂帖について

中 田 勇 次 郎

宋代に刻された米芾の法帖には、紹興米帖、群玉堂帖、松桂堂帖、宝晋斋法帖などがありここに取りあげようとする英光堂帖もその一つである。紹興米帖は南宋高宗の紹興十一年（一一四一）に聖旨を奉じて模勒上石されたものであり、十卷あったという。程文榮、南邨帖致、宋高宗刻米元章帖に考証がある。今、宋拓米襄陽行書、（民国四年六月初版、商務印書館発行）としてその一帖が紹介されている。帖首に「米芾行書」と篆題して、米芾の尺牘二十一帖を二十六葉にわたって刻している。この二十一帖の中、四帖は馮銓の快雪堂帖に収められ、一帖は呉榮光の筠清館法帖にあり、二帖は故宮博物院の故宮法書に真蹟本がある。群玉堂帖十卷は韓侂胄（一一五一—一二〇二）の刻した著名な集帖で、はじめは閩古堂帖とよばれ、韓侂胄の没後この名に改められた。晋、隋、唐および宋人の帖を集刻し、その第八巻が米芾の書蹟を収めている部分であり、現在、この部分の二種の残帖が紹介されている。一つはもと高島氏の蒐集品で、現在、東京国立博物館に収蔵されているもの、一つは好事家云々ではじまる論書帖で、今個人の収蔵に帰しているが、わが国には早くに山本竟山の紹介した写真帖がある。松桂堂帖は米芾の曾孫米巨公が廬山の松桂堂において刻したもので、およそ宋理宗の淳祐八年（一二四八）ごろに成っている。内容は米芾の真蹟ばかりでなくその石刻拓本も兼ね収めている。原帖は見られないが、英光堂帖のなかの米巨公の跋の付いた催租帖、墨莊帖などは、もと松桂堂帖に刻されていた帖が誤って英光堂帖に挿入されたものであるという。これも南邨帖致に見えている。宝真斋法帖は、近刊の宋拓本があり、咸淳三年（一二六八）曹之格が無為軍において、家蔵の晋帖および米芾帖を集刻して十巻としたものである。晋帖には多く米芾旧蔵のものを集め、中でも謝安帖と王羲之の王略帖と王献之の十二月帖は米芾の自刻の原石拓本を巻首に収めている。また、この帖の第九、第十には米芾の書蹟多数を収めている。以上のように、南宋になって高宗が米書を愛好してこれを刻したのをはじめとして、相ついで米書の刻帖が作られていた。英光堂帖もこの米

書の好尚の盛行した時期において、岳珂によって刻されたのである。

岳珂（一一八三—一二四三）はあざなは肅之、倦翁と号した。祖父が忠勇な武将で名高い岳飛（一一〇三—一一四一）で、父は森という、常州、湯陰（河南）の出身で、嘉興に住した。官は戸部侍郎となり淮東総領制置使に至った。博学で詩文をよくし、著書には経書を相台書塾において校刊した「刊正九經三伝沿革例」があり、また、「鄂国金陀粹編」「梘史」「愧郊録」詩集に「玉楮集」などがある。あわせて法書の鑑賞にすぐれ、收藏に富み、家蔵の墨蹟を集録し、末卷に祖父岳飛の書蹟を収めた「宝真齋法書贊」二十八卷がある。この本に載せた家蔵の真蹟は歴代帝王にはじまり、晋、梁、陳から唐、五代、宋にいたる名人の真蹟を収めて、一々に自ら跋語と贊を付している。岳珂はとくに米書を好んだといわれるように、この第十九と二十の二卷が米市に充てられている。この中に英光堂帖の原蹟と見られるものが著録されているので、この帖の研究には欠いてはならない貴重な文献である。

岳珂が刻した英光堂帖は、今、完全なものとは伝っていない。この帖のことは明の范大澈の「碑帖紀証」のなかに、「英光堂帖、宋岳珂刻。武陵書軀沈復魁云、豊存叔購得袁柳莊家全部。今止一冊。歸於仲父東明先生。餘不知散落何所矣」とあり、明代でも伝存していたのは全本のうち一本のみで、その他はどこに散落したかわからなかったという。早くにその存在は貴重なものであった。

現在、英光堂帖は、清の徐渭仁の覆刻した本に依って見ることが出来る。この本は墨拓一帖より成り、開卷の標題には

英光堂帖。鄂国宝真齋法書第□。本朝能書人帖門。宝晋書簡帖。（以上四行）

とあり、下に「徐渭仁印」「徐氏文台」「上海徐氏寒木春華館道光壬寅後所藏」の三印が刻されている。内容はすべて米市の尺牘で、「芾啓早略一拈未慰久別」からはじまり、「芾頓首再拜先日吾友」に了る三十五帖を収め、末尾に岳珂の長跋と、徐渭仁の道光二十四年（一八九八）の自跋を刻している。^{（注2）}

徐渭仁（一一八五—一八五三）字は文台、号を紫珊という。上海の人。陳曼生、張叔未等と交遊し、金石の鑑識に精しく、收藏も豊富であり、みずから鈎摹をもよくしたといわれる。かつて隋の美人董氏墓誌の原石精拓を入手して、自ら随軒と号した。篆隸を善くし、山水花卉および画竹にも工みであった。著述に「随軒金石文字」がある。この英光堂帖は道光二十二年（一八四二）蘇州において入手し、ただちに名工の胡衣谷に依頼して細心の注意の下に横刻せしめ、二年の歳月を経て成ったものである。なお、家蔵の本では、帖ののちに丙子十一月、許修直の墨書した跋が

ある。許氏はこの重刻本の旧蔵者である。

この帖の標題の「鄂国宝真齋法書第」の下には巻数が刻されていたのではないかと思われるが、どういふわけか文字が欠けているので、この帖が第何巻であったかわからない。錢泰吉の所見の^(注2)一冊には、「英光堂帖第五、鄂国宝真齋法書第五、本朝詩文門帖、宝晋齋蚕賦帖」と四行の標題があったという。これによるとほぼ同一の形式をなしているので、徐本はこれと一具のものであることがわかる。これに従うと第一行の英光堂帖の下にも巻数があつたはずである。両帖ともに「本朝能書人門」といい「本朝詩文門帖」とあつて、本朝という二字を冠しているので、この英光堂帖というのは、米芾だけの法帖を集刻したものではないように思われ、あるいは岳氏家蔵の二王その他の名蹟をも刻したものであつたかもしれないように見えるが、英光堂帖という名称は米芾帖を意味するので、本朝云々というのは、岳氏家蔵真蹟の分門を記したと解するほかはない。いずれにしても、英光堂帖のなかに第五帖が米芾の蚕賦帖（法書贊卷十九に掲載）から始まるものがあつたことは確かであろう。

宝真齋法書贊は岳氏家蔵の真蹟の著録であり、同時にこれが英光堂帖の内容を包含すると見てよいであろう。この巻十九に、宋名人真蹟、米元章書簡帖上、ついで米元章書簡帖下を載せ、つぎに米元章靈峯行記帖以下詩文題字等を列挙し、巻二十もひきつづき米の詩文を収め、末尾に米芾の臨した晋唐人の名蹟を載せている。詩文題字のことは後に述べるとして、ここではまず宝真齋法書贊の米芾の書簡帖とこの徐氏重刊英光堂帖との関係について考察しなければならぬ。

岳珂の跋によると、米元章書簡帖はすべて六十四帖あつた。はじめの五帖は嘉泰二年（一二〇二）中都の范氏から入手したもの。次の十帖は開禧三年（一二〇七）李奉寧の客の何師説から入手したもの、次の四十帖は嘉定元年（一二〇八）京師の官鬻者（御用商人）から入手したものの、つぎの九帖は嘉定二年（一二〇九）徳清の李氏から入手したものという。そして「その間、四詩を同巻とし、又別刻せず」と付記している。ただし、法書贊にも書簡帖の末尾にはほぼ同文に近い岳珂の跋があるが、法書贊の跋文は、このあとの九帖の入手先の名が、余章の朱氏であり、その間四詩を同巻とする云々の付記は、「顛末印識の全きもの半なるもの、通じて五十所」とあり、文を異にしている。

法書贊の書簡帖の内容を見ると、上編には二卷二十九帖、下編には三卷三十五帖あり、合せて五卷六十四帖となり、跋文の六十四帖という数字と一致する。本文の帖数もこれと同じである。ただし、各標題の下に、各帖の行数を明記している。この行数と各帖の字数を対照して見る

と、行数と字数の不調和の部分がある。例えば上巻第十五帖は行数が三行とあるが字数が九十七字あり、これは何かの誤りがあるとしなければならぬ。書簡帖上の第十帖から第二十一帖までの間の帖には、何らかの錯乱があるらしく、明記する行数と本文の字数との不調和や内容の上からの疑問のものもある。例えば後述のとおり上下巻とも第十帖には錯乱があるようである。果してこの法書賛に収めた書簡帖六十四帖が、岳珂の跋文の六十四帖と順序、内容ともに一致するかどうか疑わしいところがある。

さて、徐渭仁重刻本の英光堂帖に収めた書簡三十五帖は、法書賛卷十九所収の米元章書簡帖下にほぼ該当する。ただし例外がある。すなわち、徐本の第九帖は宝月觀詩帖（法書賛卷二十所載、ただし、行書十一行とあり、この帖に七行となつてゐると異なる）であり、第十帖は法書賛書簡帖下第十帖の前半を取り、後半は法書賛書簡帖上の第十帖の後半につづいてゐる。徐本の第十一帖は、法書賛書簡帖上第十帖の末尾の十三字にあたる。徐本の第十二帖は、法書賛書簡帖上の第十一帖にあたり、徐本の第十三帖は法書賛書簡帖上の第十二帖に相当する。また、徐本の第十五帖は催租詩帖（法書賛卷二十所載）である。以上の例外のほかは、法書賛書簡帖下と徐本英光堂帖とはほぼ一致する。要するに徐本の英光堂帖は大体において法書賛書簡帖下の部分の内容に相当するわけである。例外として、書簡ではなくて詩文に属する宝月觀詩帖と催租詩帖が収められているのは、徐本の岳珂の跋文の付記に、その間四詩を同巻に刻入して、別に刻しなかつたことを記しているのに相応することになるが、果してこの跋文の付記が岳珂の原文であるかどうか疑わしい。というのは法書賛の跋文ではこの部分が文を異にしているからである。岳珂の原文は法書賛に従うべきであり、徐本の英光堂帖には誰か後人が手を加えてこの詩帖を挿入した疑いがないでもないが、あるいは岳珂の跋文が二種あって詩帖を挿入した刊本もあつたとも考えられぬこともない。

徐本の英光堂帖の内容は以上のとおりであるが、この本は何といつても米芾の真蹟を刻したものである。米芾の書蹟の真相を知ることのできる上で、たいそう貴重な資料であり、刻法も精巧であり、書蹟としても鑑賞に値するものである。これによって、版本ながらも各帖の書体と書法を実見することができ、字句の改行の形式も明らかになる。その上、法書賛は版本で伝えられているので、文字の誤りや異同もあるが、徐本は真蹟に依つてゐるので、徐本によってそれを校正することができる。このように資料として貴重であり、また、伝本も稀少である。

も一つ注目しなければならないことは、この書簡帖が明の張丑の真蹟日録二集にも掲載されていることである。これにははじめに宝晋齋簡帖

米芾の英光堂帖について

(この場合の宝晋齋は米芾をさす) 本朝能書人帖門、宝晋書簡帖上と題し、「芾頓首再啓。今歲當從聖奏計」から、「芾皇恐來早為一麪」に至るまですべて二十八帖を収めている。このうち、第十五帖が即事詩帖(不応武康清溪云々、法書贊卷二十所載)であるほかは、すべて法書贊の米元章書簡帖の上下にわたる帖を取っている。しかし順序は区々になり、書簡帖上下からあわせて十数帖づつを順序不同に採用している。ただし、日録の第十一帖の首に「芾頓首再拜」五字が欠けて、前帖末に入り、第十二帖は前半を欠き、第十五帖は徐渭仁本とは逆に、法書贊の書簡帖上第十帖前半と書簡帖下第十帖後半を合せたものであり、徐渭仁本の反対の組合せによって、却って法書贊の錯簡を示すことになっている。第十五帖の即時詩帖は、徐本の宝月觀詩帖、催租詩帖とともに、詩帖を書簡帖に挿入した体裁になり、前記の岳珂の跋文付記の事実を裏付けすることになる。このような詩帖を挿入した英光堂帖のあることがさらに確かめられるわけである。岳珂の跋文を末尾に付することは法書贊と同様である。ただし、その九帖は徳清の李氏より得て、四詩を同巻にして別刻せずというところは、徐本と同文になっている。

なお、真蹟日録には、上記とは別に法書贊書簡帖に掲載されている米芾の書簡帖を随所に著録している。例えば書簡帖上の第二帖、第九帖、第十五帖、第十六帖、書簡帖下の第三十三帖などみな別に真蹟本の伝わるものがあって、著録したのである。

左に、法書贊の書簡帖上下六十四帖の品目をかけ、その行数、字数および真蹟日録と徐本の英光堂帖のある部分を明示して別表とした。あわせてのちに徐渭仁本の英光堂帖の積文を掲げ、他本との異同を注記した。積文の改行は原帖のままとした。

宝真齋法書贊卷十九

	米元章書簡帖上	法書贊行数	法書贊本文 字数	真蹟日録 数字は 順序	英光堂帖 数字は 順序
1	芾頓首再啓。今歲當從聖奏計。(以下略)	9	63	日録1	
2	芾頓首再拜。蒙教。二十一日望屈大旆。	9	61	日録2	
3	太夫人玉裕万福。	4	31	日録3	
4	芾頓首再拜。右丞資政春官恩主鈞席。	21	144	日録4	
5	芾頓首啓。蒙教審起居冲勝。	10	79	後半日録12	
6	芾頓首再拜。久違長者。	13	85	日録13	

26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7
芾頓首啓。適奉賀留刺。晚來起居万福。	向承惠洪氏石刻。多感。	賀知章草書。唐人歌詩。	老兄幾子。吾龜兕十六矣。	獻頓首再拜。相從之樂、自卯及巳。十五年矣。	芾頓首再拜。知有令郎之戚。	芾頓首再拜。聞公有官職庄人之說。	芾頓首再拜。至孝景温觀察台座。	芾頓首再拜。觀使枢密太尉先生鈞席。	芾頓首再拜。彦和通判承議閣下。	芾頓首再拜。君發太尉台座。	芾頓首再拜。經宿恭惟台候万福。	六月二十日。芾惶恐頓首上啓。	芾即日蒙恩。未即瞻望。	芾啓。蒙教。昨夕經義。真蘇門生也。	光頓首。向承貽教。無便久不得為答。	芾惶恐頓首再拜啓。大雨恭惟台候万福。	芾頓首再啓。比苗幕過。	芾頓首。十日之歡。	芾惶恐頓首。專介踵門。
11	9	3	10	12	16	12	17	13	13	13	3	10	13	9	9	7	9	10	13
91	57	24	65	86	70	84	87	107	86	126	97	98	46	105	59	67	60	90	107
					日録 11	日録 10							日録 26		英光 13	英芾 12	前半日録 22	日録 21	日録 14
														12行	9行	4行 門中以下 3行 18字			
														105字	59字	13字 英光 11			

米芾の英光堂帖について

米芾の英光堂帖について

29	知庵成自逸。仰慕不已。	11	84				
28	芾頓首再啓。蒙眷有素。不敢自外。	10	78				
27	芾頓首啓。知曾賜教。使下失去。	10	82				
米元章書簡帖下							
1	芾啓。早略一揖。未慰久別。	7	63		英光堂帖	7	63
2	芾頓首再拜。右史舍人老兄閣下。	11	80		英光1	11	80
3	芾頓首再啓。行日伏蒙尊造枉駕。	9	61		英光2	9	63
4	黻啓。前人廻。郡官訪及。	8	74		英光3	8	74
5	黻頓首。雨寒安勝。不知在施水資聖。	6	38		英光4	5	38
6	芾頓首再拜。運副奉議明公節下。	13	95		英光5	13	95
7	芾惶恐再拜。私居杜門。以禪悅為樂。	12	119		英光6	12	119
8	芾頓首再拜。昨日煩聒。出京始一飽也。	11	84		英光7	11	84
9	二十五日。芾上啓。得十四日書。	6	50		英光8	7	54
10	黻啓。昨日承教。直夜不及答。	8	51	後半日録22	英光9	5	33
11	芾惶恐。蒙教審台候万福。	3	52		※(宝月觀詩帖)		
12	三月十一日。芾頓首啓。衰老蒙誤恩寵。	9	49		前半英光10		
13	芾頓首再拜。運使大夫文節下。	12	45	日録23			
14	芾再啓。高郵不須亂置生事。	13	119	日録24			
15	芾惶恐。前辱臨顧。兩日打糧借人未得。	7	47	日録25			
					※(英光15)	8	73
					※(催租詩帖)	13	119

16	芻啓。適方上状。使至辱教。	11	61	英光 16	11	61
17	芻頓首再拜。初熱恭惟神明相佑。	9	56	英光 17	9	58
18	十一月二十一日。芻頓首上記留守大資政丈鈞座。	18	179	英光 18	16	付跋4行、本文177字跋24字
19	芻頓首再啓。故人作發運使。都不照管下邑。	8	53	英光 19	8	52
20	倅同官來江寧。少小相識。	12	86	英光 20	12	87
21	糖霜大治喉咽。	3	18	英光 21	3	18
22	真麝香一剂。	3	15	英光 22	3	15
23	老妻上問夫人玉体万福。	9	72	英光 23	9	71
24	芻頓首啓。昨日特承寵臨。	7	47	英光 24	7	47
25	芻頓首再拜。在無為一書。作廣州題達。	11	79	英光 25	11	79
26	芻頓首再拜。丹陽人安。旧治偃藩上游。	5	34	英光 26	5	34
27	海岱絕唱。已刻下柱。	3	27	英光 27	3	28
28	芻頓首再拜。運使大卿台座。春序向和。	11	78	英光 28	11	78
29	黻補填尚少八日。以新府公至。理須出見。	7	54	英光 29	7	54
30	芻惶恐。來早為一麪。	5	34	英光 30	5	34
31	芻惶恐再拜。彥稽提舉太史公甲兄節下。	13	103	英光 31	13	103
32	芻啓。衰晚辱誤恩。法不可辭。	6	35	英光 32	6	35
33	不煩如此。前言甚易。	6	29	英光 33	6	29
34	昨夕作此簡。未及遣。	6	42	英光 34	6	42
35	芻頓首再拜。先白吾友。	9	71	英光 35	9	71

米芻の英光堂帖について

英光堂帖徐渭仁重刻本积文

英光堂帖

鄂国宝真齋法書第

本朝能書人帖門

宝晋書簡帖

1 芾啓。早略一揖。未慰久別。

承來諾久候無好。(語)(耗)(心)故困

懣歸息。傾仰傾仰。來早願同

令兄。見臨一飣_(飯)訖。同至山房。

然後歸治行未晚也。切切。餘

面罄。草草。芾頓首。

致平國士。

2 芾頓首再拜

右史舍人老兄閣下。蒙

手翰。祝

尚方珍體。拜

嘉增幸。來日当引九日拜

臨顧之辱。併叙

謝意。謹奉啓。不能罄所言。芾

頓首再拜。

希聖舍人親家台坐。

來日東華。得一介相引乎。吏

部至今不見人來耳。

3 芾頓首再啓。行日伏蒙

尊造

枉駕。水次不遑迎謁。內積

悚恐悚恐。不審

尊兄資政。何日到_(向)

闕。欲拜狀也。芾疎繆。正託

德門。每賜

_(訓)誨督。使逃罪戾。至幸至幸。

芾頓首再拜。

4 徽啓。前人廻。郡官訪及。方

下船著公服。又欲即行。故

草草數字。必不恠也。輒假

小舟至郭。送彥誠觀師還

寺。舟至即西。至幸。如期少頃
至也。餘到潤留書復古次。百穴
草草。^(卷) 獻頓首。
不二禪師故人

5 獻頓首。雨寒

安勝。不知在施水資聖。
奉尋不見。快快。張公必
拜見。晚歸可少。(法書贊原注、案此下永樂大典原本欠) 獻頓
首

彥誠觀師同(此)。

法書贊「此」字あり

6 芾頓首再拜。

運副奉議明公節下。去

陳聞

使節至許。至建雄鎮專

介上狀。久之廻云。至汝還

台。阻一披

晤。此情悵然。故再奉啓。并

米芾の英光堂帖について

前狀上

納。霜寒深冷。恭惟

尊體動止万福。区区已具

右狀中者、不重述。不宣。

芾頓首再拜。

運副奉議明公節下。十一日狀。

7 芾^(世)皇恐再拜。私居杜門。以

禪悅為樂。彥舟去後。不

聞左右動靜。鄉風永

懷。不能已已。藹寒。比日官況

何如。門中上下均慶。去歲

之念。必少弭忘。^(弥)聞其素屬

疾。非小兒五日間。忽然不

見者。幻法有如是。不以禪

悅。何以為遣。藹寒。千万珍重。

二月。或所請宮觀不報。即扣

閣。惟珍葆珍葆。芾頓首再拜。

厚之知府學士德友。

8 芾頓首再拜。昨日煩

聒。出京始一飽也。經宿

起居沖勝。白熟求四枚

差小者。卓上碧水晶。与

老駿庄紙。可否。以吳

顧道約來相見。故

未行。早飯了。東邁

依依。奈何奈何。芾皇恐上

厚之官使學士恩旧。

范寬四幅贈老友

如何。

9 新創亭觀之盛。又非

海岱比也。宝月觀用觀

風樓基。高出雲表。詩曰。

濁尽塵難掩。光分

逐露門。香清得桂

子。珠瑩墜花鈿。

求一篇見海月処也。

10 敝啓。昨日承

教。值夜不及答。午間得假

訪及。面叙俸分支使

之數。属出外邑五七日。

比。邵伯爪洲須十日一

相見乃佳。

成伯公

敝頓首

11 門中各惟

清勝。郎娘長茂。

芾再拜

12 敝頓首。向承

貽教。無便久不得為

答。以致久仰之素。想

高明亮之。春和。

道味何如。一水之阻。未

遂展接。千万珍厚。

有便數枉書為望。草

草(遣) 馘頓首。

僧正文公

13 芾啓。蒙教。昨夕經

義。真蘇門生也。待都

佯不会。却是惜岐首

也。今送去四十賢。購于

泗州一過客(寔)。陳主簿名師

仲。乃芸叟生甚艱。揚

有善伝写者開節奉

為。吾顛。出一千作手。功画

八本奉寄。取幞頭人来

取也。葉义夜来告夢云。

去一顛。得一賢。亦何所在。

不知何祥也。紙足為大。

(英光堂帖付記、「此簡原本下脱」)

(法書贊注「此落文義多不可解。疑有脱誤」)

14 芾再啓。高郵不須乱置

生事。暫居非吾鄉我里。

米芾の英光堂帖について

無人句副(句)

定国是也。牽復既去。只

養別人。四時纂要。四月一

雨又主旱。請借一閱。道路人

言。高郵依旧水滸。雨雪不

少。不知果否。昨過彼時。水滸。見

邵伯(也)已次数道通湖港。皆以土

填塞断。從初救田。今合放

開耳。想不一处。豪姓因

而擅之。恐非公家利也。

芾頓首再拜。

15

一司日日下賑濟。一司且且催租稅。

单状請出三抄納(也)。弊邑以身当夏稅

之責。不令受賑時催。

百姓眼中聊一視。白頭縣令受

簿祿。不敢鞭笞怒

上帝。救民無術告

朝廷。監廟東歸早相乞。

芾呈

16 芾啓。適方上状。

使至辱

教。欣審晚刻

尊候万福。并蒙

佳茗為贖。併深感悚。来

日潮晚。幸

臨屈一飯也。区区容

面叙。且奉此為

謝。不宣。

芾再拜

志行通判承議老兄。

17 芾頓首再拜。初熟恭惟

神明相佑。

尊体動止万福。(動止二字、法書替本欠)

賓老以英才受

睿知。布

上寬書。暫至沢国。而芾以

官期当去。不得少棲

清苴。以此為恨耳。

芾頓首再拜。

18 十一月廿一日。芾頓首上記。

留守大資政丈鈞坐。(座)私居乏人数探

伺。竟阻追攀

大施。此情惘惘。念蒙

令弟弘拭。而久与

明甫遊也。故自竭有以献。惟

公宏恕其愚。而矜其志之善也。願

公開懷以待天下之士。猶恐人人不自信。勿

以泥塗之久。懷廷尉勝門之心。深閉固

拒。以絶天下之士。願以常情処人。而

躬行高世之事。忘恩怨。会通一致。

出人意外。晏然為

明主安一世之人。起治功。致太平。此為

(識)下誠之所瞻望。中夜而興。披衣呵

筆草略。死罪(死罪) (法書替、日録は死罪二字多し)

右簡尺。先 門吏米芾頓首再拜。

友仁鑒定。

(法書替は右簡尺先友仁鑒定八字なし ここは衍字であろう)

19

右簡尺。先臣芾真跡。臣米友仁鑒定恭跋。(法書贊原注「行書二行」)。

芾頓首再啓。

故人作發運使。都不照

管下邑。今

十連作師。^(帥)当似

臨淮縣長官時故事。且^(但)

一片心脾。依旧佳在。(不)(法書贊、日録「不」字あり)

知委悉得過否。

芾^(皇)恐再拜。

20

伴同官来

江寧。宰少小相識。父処

(法書贊「宰」字欠く、日録「宰」字あり)

刁幕。熟郷人。

一戎。同官来須少過從。

亦是未得報。間同出入。

遊山之人。三処是飯主人。

貴人出入難。不敢牽率。

米芾の英光堂帖について

知客位^(榜)勝甚嚴。此為常

人設耳。豈米老有不得

船之理。呵呵。俟

面干也。

芾^(皇)恐再拜。

(法書贊原注「此帖首行必有脱誤」)。

21

糖霜大治喉咽。甘

辛尤能發散。含

化佳。芾頓首。

22

真麝香一齊。^(劑)置痛

処。薰透。氣玄安

芾諮

23

老妻上問

夫人玉体^(万)万福。

楊家^(老)夫人乍到。未得去拜。

屈同官于此。得款還往也。

才^(回)廻謁

米芾の英光堂帖について

楊簽歸便行。知有人在

彼。故立草草作数字。不得

周悉。書表司与仮。遂（令）小兒

（法書贊「令」字あり）

作書。不罪不罪。芾再拜。

24

芾頓首啓。昨日特承

寵臨。属王氏兄弟飯。遂阻于

門迎。留以

朝銜。謹先上

納。且夕紙

造。不宣。芾頓首再拜。

景仁通判宣德兄。

25

芾頓首再拜。在無為

一書。作広州題達。未衰

老。忽西去。出意外憂畏

而已。因賞心亭。与

元龍属酒。選三麗人。

歌自作詞。云。有人去広

德。立作此書。用致詹仰。

草草。不罪不罪。

芾惶恐

司諫台坐^(座) 門中各

安勝安勝

（法書贊云。右楮紙詩書等十幅。先臣芾晚年真蹟。臣米反仁
鑒定恭跋。詩摘在詩文帖中。）

26

芾頓首再拜。丹揚人安。

旧治

偃藩上游。

琴尊足以自適。時來則為

蒼生起耳。芾頓首再拜。

27

海岱絕唱。已刻于柱。与劉

顛者对也。芾頓首

非二顛者不刻。七月六日未。（法書贊「未」字欠）

28

芾頓首再拜。

運使大卿台坐^(座)。春序向和。恭惟

澄清之暇。

神明相佑。

德履起居万福。 芾被遣。竣

命于

左右。已次于潤。舟大水漲。過橋不

得。未即

参侍。伏乞為

上珍厚。專介上啓不備。 芾頓首再拜。

運使大卿台坐。

29 齏補填尚少八日。以

新府公至。理須出見。来日且参

仮登舟。至真滌日。移疾報本州。

不審

尊意如何。 齏蒙

恩有素。不勝傾倒之至。

齏頓首再拜。

30 芾^(體)皇恐。来早為一麪。江楼

少延

米芾の英光堂帖について

道韵。只今秘衣在此。烹

茶久俟。 芾^(體)皇恐

府公少監大夫公。

31 芾^(體)皇恐再拜。

彦稽提举太史公甲兄

節下。抱疾之官。十日九仮。

事皆委薛侯。改雙

槐堂為寧一堂。射堂雨。

敗堵悉見。北山万壑。 命日^(老)

仰止堂。於

甲兄可謂無負矣。 芾

衰落之人。每臨一事。欲^(老) (日録「落」字に作る)

仰兄精力。不已。力疾答

專使。不宣。 芾^(體)皇恐頓首。

彦叶^(體)太史公提举節下。 (日録「叶」字に作る)

四月旦日状。

32 芾^(體)啓。衰晚辱

誤恩。法不可辞。 祗益悚

懼。蒙

教賀重其慙悚。付使(日録「其」字に作る)

具此。草草。芾頓首。

亦虛吾友。

33 不煩如此。前言甚

易。当必不到入

台章也。呵呵。

餓殺客

也。芾頓首。

安中吾友。

34 昨夕作此簡。未及遣。承

寵誨。荷

垂眷。今早食改(後)。作晚阻(法書贊原注、案作字上下有欠文)

次に、宝真齋法書贊の詩文帖が、書簡帖とおなじく英光堂帖に刻されている。これに関しては、清代になって翁方綱（一七三三—一八一八）が英光堂帖の残帖を見て跋を書いている。(注4)それによると英光堂帖残拓本凡五冊。内、雜詩帖（仲若呼不聞）、道林詩帖（陟嶽不自期）、姑孰詩帖

（下与照洞）、万籟詩帖、壯觀前詩帖（無涯小智）、甘露詩帖（欲雨氣不透）、研山詩帖（山研雲時抱）、賞心詩帖（晴新山色黛）、四大字詩帖（鷗鷺、一園、賞心、昔夢）、鑑遠前詩帖（夜登鑑遠）、鑑遠後詩帖（瀉鷺塞依水）、獄空行帖、槐竹詩帖、催租帖、以上十七帖はみな宝真齋法

(日録「改」に作る。法書贊「後」に作る)

城外。約来早告顧

舟中。北城外一飯。

幸甚幸甚。芾頓首。

35 芾頓首再拜。

先白吾友。疎展晤。(晤)思企。暑中(日録「晤」字に作る)

起居何如。小兒未聞

歸誨。願以童蒙之道勉

之。謹遣侍筆研于

左右。惟

久要終始造成之。悚悚。異日報

德。不宣。芾頓首再拜。

先白吾友。同舍万福。

書賛中に収められているものである。十二丈帖、涪溪帖、表民帖、塗山帖、評書帖、墨莊帖、浣溪紗帖の七帖は、法書賛に載っていないものである。はじめの十七帖（四大詩帖を四帖に数える）が英光堂帖中のものであることには問題はないが、あとの七帖にはみな岳珂の題賛がない。催租帖の石本にも跋賛がない。（法書賛にのせた催租帖には岳珂の題賛がある）。催租、墨莊二帖の石本にはいずれも米芾（米芾の曾孫）の跋がある。巨空の跋の内容を見ると、岳珂と年代の上に齟齬するところがあり、この二帖は岳珂の刻したものではない。また、涪溪帖は涪溪の石壁の拓本を摹勒したもので、これも岳珂の刻ではない。そこで、宝真斋法書賛にのって岳珂の跋賛と一致するものを証拠として、英光堂帖の品目を考えるべきであるという。

又、翁の跋英光帖の一則に、鑑遠後帖二十字を論じ、又、跋英光帖の一則に、曹子建応詔詩帖を説いているが、この二帖はともに法書賛に掲載されるものであり、これも英光堂帖中のものであることがこの跋によってわかる。

米芾の詩文集、「宝晋英光集」（湖北先正遺書本に依る）の中に収めた詩文の標題の下に新添英光堂帖と付記するものは、英光堂帖に刻されていたものに依って、集の詩文を補入したものである。今、集中からこの付記のあるものを拾うとすべて二十三帖ある。ところで宝真斋法書賛の卷十九、靈峯行記帖以下卷二十の末尾までは、米芾の真蹟詩文を集載して、一々その跋と賛を記したものである。この詩文帖には、さきの翁方綱の跋文に掲げたものがあり、あわせて宝晋英光集に英光堂帖と付記するものの中十八帖が掲載されている。そこで別表を作って法書賛の詩文帖において英光堂帖に刻されているものをまとめて記入すると、次のごとくになる。

宝真斋法書賛所載米元章詩文帖

靈峯行記帖

獲硯帖

四大字帖

。曹子建応詔詩帖

翁方綱跋

。蚕賦帖

宝晋英光集 錢泰吉跋

。黄龍讚帖

宝晋英光集

米芾の英光堂帖について

米芾の英光堂帖について

- 。獄空行帖 翁方綱跋 宝晋英光集
- 。四大字詩帖 翁方綱跋
- 。鷗鷺寒依水（過当塗） 宝晋英光集
- 。一園松竹冷陰森（青山） 宝晋英光集
- 。賞心亭上群山雪（鑑遠樓） 宝晋英光集
- 。昔夢浮生定是非（拜書學博士作） 宝晋英光集
- 。海嶽詩帖（以上卷十九） 翁方綱跋 宝晋英光集
- 。硯山詩帖 翁方綱跋 宝晋英光集
- 。甘露詩帖 翁方綱跋 宝晋英光集
- 。宝月觀詩帖 翁方綱跋 宝晋英光集 英光堂帖
- 。鑑遠前詩帖 翁方綱跋 宝晋英光集
- 。鑑遠後詩帖（過当塗詩と同じ） 翁方綱跋 宝晋英光集
- 。即事詩帖 翁方綱跋 宝晋英光集
- 。催租詩帖 翁方綱跋 宝晋英光集 英光堂帖
- 。槐前竹後詩帖 翁方綱跋 宝晋英光集
- 。万籟詩帖 翁方綱跋 宝晋英光集
- 。壯觀前詩帖 翁方綱跋 宝晋英光集
- 。壯觀後帖 翁方綱跋 宝晋英光集
- 。姑熟詩帖 翁方綱跋 宝晋英光集
- 。道林詩帖 翁方綱跋 宝晋英光集

・賞心詩帖

翁方綱跋

・寿時宰詞帖（浪淘沙）

宝晋英光集

墓誌銘

山谷大悲懺贊帖

以下臨帖

ただし、宝晋齊英光集に英光堂帖と付記するものには、右の法書贊に見える十八帖のほか、龍真行、杉徑、早來堂、王獻之蘇氏宝帖贊、章聖天臨殿銘の五帖があり、これは法書贊には見えないものである。ところで、清の程文榮の「南邨帖攷」群玉堂帖の条によると、龍真行と杉徑と早來堂の三帖は群玉堂帖中に刻されている。宝晋英光集の記事によるとこれらは英光堂帖に刻されていたことになるが、あるいは群玉堂帖との関連があるのではないかとも考えられる。なお、龍真行のちに清の吳榮光の筠清館法帖に刻されている。英光堂中のものがすべて法書贊に掲載されているとは限らないことも考慮しておく必要がある。

そこで宝真齊法書贊について考えてみると、はじめの靈峯行記帖、四大字帖、獲硯帖をのぞいて、曹子建応詔詩帖から寿時宰詞帖までは、翁方綱跋および宝晋英光集によって、英光堂帖の帖であったことが確かめられる。蚕賦帖のことは清の錢泰吉の「甘泉郷人稿」の英光堂帖跋に見える。宝月觀詩帖と催租帖は徐渭仁の英光堂帖に収められている。即時詩帖は真蹟目録に収められている。墓誌銘以下は英光堂帖にあったかどうか不明でない。米芾の臨王帖は宋拓宝晋齊帖に刻されているから、刻帖があったことがわかるが、英光堂帖にあったかどうかこれもまた明らかにすることができない。

要するに、法書贊に掲載する米芾の書簡帖および詩文帖のほとんど大部分が上述のとおり英光堂帖に刻されていることは、法書贊の卷十九と二十とが、岳珂の家藏の米芾の真蹟を集録したものであり、英光堂帖はこれらの真蹟に基づいて刻されているわけで、書簡帖はおそらくその全部、詩文帖もそのほとんどすべてが、英光堂帖の品目に相当するものと考えられる。ただし、法書贊以外のものも多少ありうることは上述のとおりである。以上の考証によって英光堂帖の全貌はなお不明にしても、その大半の成立事情を見ることができたと思う。なお、翁方綱は英光堂

米芾の英光堂帖について

帖の刻されたのを紹定年間（一二二八—一二三三）としている。法書贊が紹定元年（一二二八）の自跋を卷内に記しているので英光堂帖も法書贊と同じところに充てたものと思われる。

末尾に徐本英光堂帖の書についても、一言触れておきたい。この帖には米芾の四十歳以前の署名と言われる齧字を用いているものが四通あり、芾字以後の書風と相違するところを見ることが出来る。芾字の書簡は宛先により内容により、正行体のものと行草体のものがあり、みな晋人の蕭敬逸脱の風韻を得て、一々変化の妙を尽している。詩帖では宝月觀詩帖がよく、すべてみな真蹟の筆意を伝えている点では、米の刻帖の中でも特出するものと言えるであろう。

注

(1) 岳珂跋（徐渭仁重刻本）

「右宣和南宮舍人。宝晋米公芾。字元章。真蹟六十四帖。（幅）分五卷。「中興初。「思陵以「万機之暇。「垂意筆法。始「好黃庭堅書。故「戒石之銘以頒。而方国之「一割。（欠）（遂）皆似之。後復「好公書。以其子敷文閣直学「士友仁。侍「清燕。而「宸翰之体。遂大變。「追晋「羈唐。「前無合作。珂家所感「詔墨。幾百軸。以歲月考之良是。（目錄有是字）（是）「故紹興間。公書尽燹「九禁。而世罕伝。最後「赤水得「珠。「頤神「北内。「躬御「宝跗。「製翰墨志。多「紀公遺事。益知「帝心簡注。「惟公是嗜。是帖蓋「天上本。（多）（間）有「内府圖書。（二字欠）（及紹興宝篋在焉。）可識前五帖。嘉泰王「戊正月得之中都范氏。次十「帖。開禧丁卯（歲）五月。得之李奉寧「客何師説。又次四十帖。嘉定戊「辰歲二月。得之京師官鬻者。（欠一字）又「次九帖。己巳歲八月得之德清「李氏。其間四詩。同卷。不復別刻。「贊曰。「論書自晋始。蓋自其風俗「之清。而流之於妍。降而六代。又以其習尚之篤。而「澆「之於專。維唐設科。身判書言。作成自初。欧褚爭先。薛「靚張顛。顏真柳便。（無）中世而後。雖經生楷隸。猶得以揚「驪而鳴鞭。五季日卑。我「宋興焉。士以德進。捨芸之「偏。既窒其進取之塗。故世「之以書名家者。皆不雜以「人。而純乎天。更「八葉之「予豐。乃「設学而「詳延。有芾者出。集其大全。「蓋繇羲獻而來。邈「崇觀而前。或營萃以拔棘。或宮牆而及肩。或小醇而「大疵。或舍正而取權。六書「之統。殆所謂芾之死。不得「其伝也。嘯嘯喬嶽。洋洋大「川。草木風雲。波濤蛟龍。我「系此評。其然豈然。較三十「里。（數）

後八百年。倦翁岳珂。（原文は「にて改行、カッコ内は法書贊の校正。目錄は真蹟目錄の校正）

(2) 徐渭仁重刻英光堂帖跋

英光堂帖。世鈔伝本。范大澈碑帖記証云。豐存叔得于袁柳莊家。今止一冊。餘不知散落何處。蓋三百年前。寶貴如此。壬寅五月。携家吳門。兵戈患難之中。一旦得之于修仙巷李氏。雖厪有三十五帖。大美忌完。亦不作求全之想。因倩海塩胡衣谷。細心撫刻。務使与原本

(3) 錢泰吉、甘泉鄉人稿卷十一英光堂帖跋。

(4) 翁方綱。復初齋文集卷二十八、跋英光堂殘帖、跋英光帖三則。

付記 明、范明泰、米襄陽外紀、清、趙懷玉、亦有生齋詩文集卷八に英光堂帖に関する記事がある。後考に俟つ。